

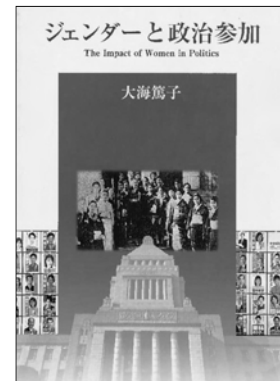
〈書評〉

大海 篤子 著

『ジェンダーと政治参加』

(世織書房 2005年 221頁 ISBN4-902163-17-9 2,200円+税)

吉川 真美子



著者は、政治学とジェンダー研究を専門分野とする研究者である。本書は、女性の政治参加をメイン・テーマとして、著者が1993年から2003年までに発表した論文を大幅に書き直したものであり、女性地方議会議員や地域活動家からの聞き取りを通して見出された日本政治の諸問題が、ジェンダーの視点による政治学研究としてまとめられている。

著者を取り巻く学界のジェンダー問題として、政治学の女性研究者の数は非常に少ない（日本政治学会女性比率8.15%）。さらに、研究対象のジェンダー問題として、日本の議会における女性議員の割合は、国会議員で9.3%（2003年）、地方議会議員で7.8%（2004年）と、先進国の中でもっとも低い。

本書で採用されるジェンダーの概念は、性別による、一方の特権化と、他方の従属化を指し、政治という「社会を支配する仕組み」の中で、一方の性に対する差別と排除によって構築された、性別間の支配・被支配の構造を問題化している（13頁）。

日本では、女性議員の数は少しずつ増加し、地域の政治活動を通して政治過程に影響を与えようとする女性の組織活動は活発化した。かくして、女性が政治的にある程度「見える存在」となっても、政治学では女性の問題は周辺化されてきた。女性を政治学において「見える存在」とするために、新たに、ジェンダー概念を政治理論に組み込むと、女性に対する差別と排除の機能を果たしてきた公的領域・私的領域の二項対立的な分析軸は見直しを迫られ、女性の政治的経験が反映されることによって多様な政治のダイナミクスが現れると、著者は指摘する（66頁）。

「女性の政治参加」というテーマの下で、著者が追究するのは「女性市民」の存在であり、それを支えるのは「政治は日常のもの」という著者の確信である。女性が、社会において自立すること、当事者として政治にかかわることができる状況が実現されれば、わざわざ「女性市民」とよぶ必要がなくなるはずと述べ（187頁）、それでも、本書では、依然として女性が社会構造的に差別されている中で、女性の政治参加の現状と問題点、あるいは参入過程を明らかにするために、著者はあえて「女性市民」というタームを用いる。

「女性市民」が提示する女性としての課題が、女性政策である。本書では、女性政策は「女性が自分らしく生きたいと願う時に、本当に必要な支援や女性が能力を発揮する可能性を保障するもの（143-4頁）」と説明されるが、その具体的内容は、女性の経験を通して明らかになる。長らく私的領域に活動を制限されてきた女性の経験の特徴は、私的領域における問題の発見である。例えば、夫の妻に対する暴力や親の介護は、私的問題であり個人的に解決すべき問題であると考えられてきたが、女性政策の導入によっ

て、「個人的なことは政治的なこと」となり、被害者や介護者としての女性の人権を守るために、法律によるドメスティック・バイオレンスの犯罪化やケア・ワークの社会化が、女性政策によって実現した(191-2頁)。

本書は、第2章から第5章まで、女性の政治参加の事例を歴史的・地域的な広がりをもって紹介し、「女性市民」の姿を明らかにする。

第2章「女性は国会をめざした」では、終戦の翌年1946年に、第22回衆議院総選挙で誕生した39人の「婦人代議士」が分析される。以後の当選女性議員の平均は13.7人であり、この大量当選は一過性の現象と見られてきたが、著者はこれを、日本女性が参政権を獲得して「政治社会の内」に加わった、女性の政治参加のターニング・ポイントとして注目し、39名の経歴、家族関係、当選後の政治活動、その後の選挙結果などを検討している。

第3章「台所からの政治参加」では、主婦連合会が注目される。戦後の物資不足の時代に、市井の女性たちが沈黙を破り、街頭集会やデモなどによって「ものいう主婦」として政治活動を始めたが、その動機は、欧米的な女性の権利の主張というよりは、むしろ伝統的な性別役割意識をもったままの、生活の向上であった。この時代の女性の政治運動は消費者運動などとよばれ、女性の存在は生産者に対峙する消費者として位置づけられ、政治からは「見えない存在」であり続けた。しかし、そのような状況の中で、女性たち自身は政治活動に参加することで自らの社会的な位置づけを知り、変革の必要に気づいた。「女には学問はいらぬ」という時代に、主婦連は学習機会を「主婦大学」とネーミングして学習意欲を駆り立て、参加者の政策形成能力を高め、政府の審議会へ代表を送り込んだ。

著者は、主婦連の、官の関与を逆手にとって消費者という看板で政治参加の機会を得たしたたかさ、政治技術を蓄積しながら政治参加に積極的にかかわる参加者を生みだした逞しさを評価するとともに、主婦連の参加者がそのような政治参加によって意識変化を起こし「主体的な参加者」となる過程を、現代への示唆とする(89頁)。

第4章「生き方を変えた女性たちの議会進出」では、東京生活者ネットワークが取り上げられる。生活者ネットは、1968年創設の生活クラブ生活協同組合を基盤として、1977年に設立された政治団体で、メンバーのほとんどは専業主婦である。80年代から、食の安全や環境問題など日常の問題の解決に向けて、自前の議員を形成して、地方議会に直接参加するようになった。著者は1998年に生活者ネットの議員に面接調査を行った。

著者は、主婦たちの、「活動との相互作用で意識が変わっていった(149頁)」過程に注目する。主婦たちの生活クラブ参加の動機は、多くの場合、家族の健康や生活の質の向上であったが、食や環境に関する情報提供や学習活動を通して、消費者としての自分と市場の関わり方を見直すようになると、日々の生活の問題が仲間や地域の問題として把握されるようになり、「生活の課題」の政治化を目指すようになった。

メンバーは、暮らしの問題をめぐって、「家族志向」の主婦から、「仲間志向」の生活者、そして「地域志向」の市民へと、意識が段階的に変容し、政治活動を通して「女性役割の再定義」を経験する。そして、さらに視角は「自分らしく生きて活動する」ことへと拡大し、「女性としての課題」の政治化が目指されることになる(143頁)。

生活者ネットは、いわゆる「ジバン・カンバン・カバン」の無い女性が地方議会に進出する方法を示している。また、生活者ネットの事例で示された主婦の意識変容の過程は、女性の政治参加促進の一つ

のモデルといえよう。

第5章「女性ゼロ議会をなくそう」は、おおむね1990年代以降に地方で開催されている女性議会に注目する。女性議会はおもに地方自治体が主体となって開催される模擬議会である。女性議会は様々な目的・経緯で開催されるが、多くの場合はイベント的であり、実際の行政に大きな影響を及ぼすことはあまりない。とはいえ、参加者は一定の知名度を獲得して、これに大きな政治環境の変化などの政治的機会、選挙資金や家族の協力等の資源がうまくかみ合った時に、女性議員が誕生する。近年では、人口の高齢化と過疎化によって、新たな「地域活性化」の推進力の中心は女性になってきており、この社会・経済の変化こそが女性に巡ってきた政治的機会であるとして、著者は、女性議会が女性議員の人材を準備する一つの仕掛けとなることを期待する(184頁)。

第6章「政治の信頼回復をめざして」は、本書の総括部分である。

女性の政治参加に焦点をあてることによって見えてきたのは、日本の民主主義は僅かな一部の人の参加によって運営されているという、日本の政治のゆがみである。本書では、それは著者が指摘するように、市民という対象において、女性を観測の定点においたアプローチによる、政治のゆがみの発見であり、高齢者や障害者、セクシャル・マイノリティなどの様々な政治的弱者を定点におけば、別の角度からの政治のゆがみが見えるという。市民の多様性が反映され、政治のゆがみが是正されるためには、私的領域での「安全」など、従来の政治では想定外であった多様な価値要素を、政治に反映させる必要がある。そのために、まずは、政策決定の場に女性議員を増やすことが重要であると、著者は主張する(188頁)。

著者は、政治学における政治の再定義を、ジェンダーの概念を使って行う必要性を指摘し、その手掛かりは、本書の事例の女性たちが、政治を自分たちの生活の道具として、政治を使いこなそうとしているところにあるとする(193頁)。著者が発信する、「政治は日常のもの」というメッセージは、女性にとって、政治参加は自分の生き方をより自由で、自立したものにするための道具で「日常のもの」であり、女性は政治に参加し、自分の意見を表明して、政策過程に影響を与えていかなければならない、というものである。

最後に、評者としての私見を述べる。著者が試みる、政治学において女性を「見える存在」にするということは、政治学という学問に内在する、ジェンダーを基盤にして構築された「目に見えない権力構造」を露にして問題化し、既存の秩序を揺るがす。ときには、それが既存の秩序への挑戦とみなされ、女性研究者の参入と展開を阻む要因となる。これは政治学に限ったことではない。学問の認識枠組みの変更を図るということには、何重もの障害があり、困難な作業である。その意味で、本書は貴重な学術的成果であり、同時に女性たちへの啓蒙の書である。

著者のいう、政治における「ジェンダーが構築する『目に見えない権力構造』」とは、本書の事例の女性たちが経験した差別と排除のシステムを指すのであろうが、その内容は、さらに意識のレベル、社会構造のレベル、制度のレベルに、分けて論じることができると思う。また、ジェンダー概念を使った「政治」の定義の見直しについて、本書の女性たちの自治的、自律的な姿勢と活動にそのヒントがあるとするだけで、著者は新たな定義を明示してはいない。「目に見えない権力構造」とは何か、人びとの多様性が反映されるような「政治」とは何か、について著者自身の明確な解答が欲しいところであるが、それを考えることが、読者である多くの「女性市民」に課せられた宿題であるのかも知れない。

(よしかわ・まみこ／お茶の水女子大学大学院人間文化研究所研究員)